

# ぷちらいふ

らいふ通信

lifsea  
株式会社リフシア

HP / lifsea.co.jp  
らいふ日記 (スタッフブログ)  
green.ap.teacup.com/lifekaigo  
2020秋Vol.60

発表者の中谷聡美さん



秀賞を獲得しました。療養型病院に入院し在宅生活が厳しいと言わ

新型コロナ感染拡大により、様々な催しが中止になっています。「民間事業者の質を高める」全国介護事業者協議会も今年も今年、動画撮影での事例発表となりました。この大会は、北海道から沖縄までを8ブロックに分け、全国の介護事業所が先進的な取り組みを発表、介護の質向上を目指します。リフシアのスタッフも積極的に参加しており、今年もリフシア神明(看護小規模多機能型居宅介護)の中谷聡美看護師が発表した「家に帰って食べたい!を叶える取り組み—医療の常識を超えて—」が関東甲信越代表として全国大会に出場しました。昨年に続き2年連続最優秀賞を獲得しました。

「慢性重腸閉塞」と診断を受け、「中心静脈栄養」(口から



スプーンを手に自分で食事をするA様

れたA様(83歳/要介護5)の「自宅に戻りたい」という強い思いにお孫さんが応え、医療機関や地域包括支援センター、リフシア神明の看

食事できない人に高カロリーの栄養輸液を体内にとり入れる方法が開始されました。教科書的に「嘔吐を繰り返す慢性腸閉塞の方の経口摂取はまず困難」と考えられていました。しかし「口から食べたい」という本人の希望と、それを叶えてあげたいと願うご家族、経口摂取を指示した主治医の先生、様々な職種が同じ方向を向いて協同した結果、リフシア神明でお食事を開始することができました。ご自身で食事を口に運ばれる映像と、「一つひとつ苦痛に寄り添い主治医と連携をとることで希望を叶えることができた」という中谷看護師の言葉に、A様の「尊厳」を介護の専門職としてどう守るのか、深く考えさせる発表でした。(取材 ぷちらいふ編集室)

## 報告 第14回全国事例発表会 「民間事業者の質を高める」全国介護事業者協議会主催 2年連続最優秀賞受賞

### 編集後記

去る8月25日、第5回「接遇プレゼンテーション大会」(茅ヶ崎商工会議所)を開催しました。コロナ禍で3密を防ぐため発表者を中心に40名が参加、12事業所15事例発表の中から最優秀賞に「フィールド★アスレチック香川」が選ばれました。受賞者は以下のとおりです。

- 最優秀賞/リフシア香川(加藤洋子・根本治樹)
- 優秀賞/リフシア鵜沼海岸デイサービス(田村紗由未)/リフシア善行(佐野悦子)/リフシア大庭(海老澤雅人)
- 審査員特別賞/リフシア松が丘デイサービス(川島悟)/リフシア浜之郷(佐藤庄治・川島茉衣子)

また、第2回リフシア事例発表会は「お客様の自立支援に資するサービス提供を全社で深める」をテーマにオンラインで開催しました。今年は7事例の発表がありましたので、テーマと発表者のみ紹介します。

- 認知症の方の意思決定をするのは誰か  
リフシア柳島 天野博美(小規模多機能型居宅介護)
- 90歳の再挑戦—トータルケアの実践—  
リフシア香川 村尾千亜希(グループホーム)
- 「できる」が増える事業所を目指して  
リフシア萩園 落合航太(デイサービス)
- 定期巡回を軸にオールリフシアで在宅生活をマネジメント  
リフシア浜之郷 谷井美也子、永田由美(居宅介護支援事業・定期巡回随時対応型訪問介護看護)
- 「BPSDがあるお客様への関わり」  
—Mr.Clean M—  
リフシア松が丘 川島悟(デイサービス)
- 認知症対応型共同生活介護に  
おける自立度向上事例  
リフシア矢畑 高橋宗真(グループホーム)
- 食べたい 経鼻栄養から、経口摂取へ  
リフシア神明 中谷聡美  
(看護小規模多機能型居宅介護)  
(順不同)

らいふ通信「ぷちらいふ」秋号 Vol.60

2020年10月15日(季刊発行) 編集/ぷちらいふ編集室

〒253-0071 神奈川県茅ヶ崎市萩園 2822-1 TEL0467-55-5102 FAX0467-55-5103 発行/株式会社リフシア



かながわ歌の旅  
鎌倉編③

今回は古都・鎌倉に纏わる歌の紹介です。明治に発表された♪汽笛一声新橋を：の「鉄道唱歌」では、六番の歌詞で



♪横須賀行きは 乗りかえと 呼ばれておるる 大船の次は 鎌倉鶴ヶ岡：と歌われ、それから九番まで鎌倉の八幡宮、円覚寺、建長寺、大仏、片瀬、江の島などが次々に歌われます。文部省唱歌「鎌倉」では

♪七里ヶ浜のいそ伝い 稲村ヶ崎 名將の：とこれまた延々と一番から八番まで、沢山の鎌倉の名所・歴史が歌われています。♪真白き富士の根 緑の江の島：と歌い出す「七里ヶ浜の哀

歌(別名「真白き富士の根」という歌が思い出されます。逗子開成中学生のボート訓練中の海難事故を悼んで、女学校の先生が詩を書き、讚美歌のメロディーに乗せて歌われるようになりました。映画にもなり、国道134号線沿いの稲村ヶ崎公園に記念碑が建っています。おまけにも一つ。♪もしもし ベンチで ささやく お二人さん：と歌い出す「若いお巡りさん」という歌謡曲に



光



光

特集

千葉県にお住まいの福寿陽子さんにインタビュー

# 口から食べることがは私たちの悲願です

せんせいせいしきょうがいの  
遷延性意識障害(植物状態)  
と診断されて

タンポポ(株式会社リフシアネット)は、リフシアの介護事業から生まれたセントラルキッチン(1ヶ月に3万食を製造)です。栄養素・物性を調整した食事を医療機関へ介護施設・障がい者施設・在宅までお届けしています。タンポポのえん下食は、食材ごとにゲル化調整した食事です。開発は、歯科医師・ST(言語聴覚士)・介護職からの意見を聞きながら行ってきました。口腔内でまとまりやすく、喉もとでベタつきにくく調整されています。むせないような咽頭での離水にも配慮しています。

このほど、やわらか食弁当に加えて在宅への商品販売(冷凍)をはじめました。特集記事として、タンポポの在宅向けえん下食をご利用いただいている福寿さん親子にお話を伺いましたのでご紹介します。



「自宅でのインタビュに、タンポポのえん下食を手にとってくださいました。(福寿弘明さん)」

## 在宅生活を支えるタンポポのえん下食について

2019年に気管切開を閉じてからは、まよよりも食べられるようになりました。弘明さんは重度のえん下障害があるため、食べられる市販品はパックジュレやヨーグルトなど甘いものが中心だったと言います。いつも「食事として、おかずも食べさせたい」と思っていました。そんな中、黒岩先生から『タンポポのえん下食』を今年の7月頃に教えてもらったそうです。



タンポポのえん下食

## 福寿さんご一家



親子写真(沖縄のホテルのプールにて)

「タンポポのえん下食があつて本当に助かりました。冷凍で届くので使う分だけレンジで温めています。味がしっかりして美味しいので、喜んで食べてくれます。重度のえん下障害であっても、安定した物性の食事が手軽に食べられるので本当に助かります。空いた時間を子供に充てることできて嬉しいです。また、心配な点はタンポポに連絡して教えてもらえることも助かりました。おかずが食べられるようになったことで、1食は、お口から食べることに変えられるのではないかと、希望が持てました。」と、嬉しい言葉をたくさんいただきました。

千葉県に住む福寿弘明さん(27歳)は、8年前の事故で遷延性意識障害(植物状態)と診断されました。水も飲まず、食事もお口から食べられない状態だったため、気管切開したうえ胃に穴を開けて直接栄養を送り込む「胃ろう」となりました。当時主治医から、「一生涯意識障害が続く。身体も動かない。しゃべれない。」と告げられ、母親の福寿陽子さんは「息子の人生は終わった」と言われた気持ちだったそうです。遷延性意識障害とは、交通事故などにより頭部に強い衝撃を受けいわゆる植物状態になってしまうことです。突然の事故で、大切な家族が意識不明の重体になりました。

たが、弘明さんとご家族は希望を捨てることなく一生懸命生きてこられました。



## 黒岩恭子先生(歯科医師)との出会い

リハビリ病棟で入院生活が続く中、黒岩先生(茅ヶ崎市内で開業する村田歯科医院院長)と出会いました。黒岩先生は歯科医として培ってきた技術や経験を困っている方に役立てたいと、全国各地の病院や施設、地域で治療や指導、ボランティア活動をされています。タンポポも開設当初から様々なアドバイスをいただけてきました。福寿さんは「まず食べられる口をつくりましょう!」と、先生が開発したモアブラシで口腔ケアを教してもらいました。弘明さんが入院中は、仕事終わりに病室を訪れ、毎晩口腔ケアと口腔リハビリを行いました。この時から「もしかしたら口から食事が食べられるのではないか。」と希望を持ったそうです。「口から食べるのは、私たちの悲願です」「リハビリ後は、時間が経つにつれ薄皮を向くように少しずつ良くなりました」「笑うようになり、Yes、No程度であれば合図ができるようになりました」「家族と食卓を囲む何気ない日常生活を取り戻したい」と願う、遷延性意識障害のお子さんを持つご家族の切実な気持ちがお話から伝わってきました。



2019年、青森県ねぶた祭で黒岩恭子先生と一緒に弘明さん。



リハビリの歩行訓練もしています

## 弘明さんの尊厳を大切にしたい

現在、弘明さんは、コロナ禍の影響をきっかけに在宅生活を始めました。訪問診療・訪問看護・訪問リハビリを使い、毎日のように通所サービスを利用して居ます。胃ろうを中心とした食生活は変わりませんが、1食だけでも「口から食べるのが悲願」と強い気持ちで今を生き抜いていらっしやいます。

タンポポのスタッフは、今回福寿さん親子と出会い、私たちが必要とされていることを知りました。このようなご縁を下さった黒岩先生に感謝するとともに、福寿さんの悲願に応えるためにも、これからも頑張つてえん下食を作り続けます。